

たまたま通りがかったおばさんから  
性教育を受ける

本よりもこっちの方がいいでしょ？♡



「君、こんなところで何してるの？」

「!?!」

近所の神社で友達と遊んでいる時に見つけたエロ本がずっと気になっていたボクは、人がいない夕方の時間帯を狙ってそのエロ本を探しに来ていた。が、運悪く知らないおばさんに見つかってしまった。

「いや、これは、その…」

（これ、Hな本じゃない。この子、まだ小学生よね？  
こんな年頃の子がもうこんな本を…）

「これがどんな本か分かってるの？  
「ううううのって、その、大人が読むものなのよ？」

「はい。でもボク、女の人の身体に興味があって、どうしても読んでみたくて」

（これって人妻もの、よね？同じ年の女の子じゃなくて年上の女性にが好きなのかしら？  
っていうか、やだ、ズボンがあんなに膨らんで…。なんだか私まで変な気持ちになってきちゃったわ。  
最近「無沙汰だったから溜まってるのかしら」



「ね、ねえ君。お婆さんの身体じゃダメ、かな？」

「え？」

「今ここで、お婆さんの身体、見せてあげよっか？」

「ホントに…？」

（この時間帯なら人は滅多に来ないはずだから大丈夫よね…）

「いいわよ。少し待っててね♥」



「ど、どうかな？おばさんのおっぱい」

「これが、女の人の身体…」

(そんなにジロジロと見つめて。こんなおばさんの裸で興奮してるんだ。ちよつとかわいい。)

「おばさん、何だかボク、変な気分になってきちゃった。その、おち○ちんがすごく熱くて、苦しい」



(す、すごい。さっきよりもっと勃起してる。

スポン越しても分かるほど大きい。

何だか私まで興奮してきちゃう…)

「大きくなったおち○ちんを元に戻す方法、君は知ってるかな？」

「え？ し、知らない。どうやって戻すの…？」

「いいわ。おばさんが教えてあげる♥  
ズボン脱いで。」

「う、うん」

「うっ、ちよっと、おばさん!?!」

「「うっやっって手でおち〇ちんをじごくと、すぐ気持ちいいのよ」

「うわ、なにこれ…」

(うっとりして、気持ちよさそう♥)

久々だから上手くできるか不安だったけど、「この分ならすぐに出ちやいそうね」

「うふふ、どうか。おち〇ちんを初めてしごかれる感触は、手」キっていいのよ」

「手」キ…。」

「そう、すぐ気持ちいいでしょ?」

「うん。おばさん。何だかおち〇ちんが変なんだ。熱くて、おしっこが出るときみたい…。」

「いいわよ。我慢しないで出しちやいなさい」

「出すって、何を?」

「いいから、そのまま身を任せるの。」

もっと気持ちよくなれるから」

「もっと気持ちいいのって…? あ、もう、ダメ。なんか来る…。」

「ん、出して♥」

「あ、ああ!」





「これが女の人のアソコ。おま○こよ」

「おま○こ…。ひくひくしてて、それに濡れてる。なんだかエロい。」

「さっきのでおばさんも興奮してきちゃったから。女の人は興奮するとおま○こが濡れるのよ」

「おばさんもHな気分って」とっ」

「そうよ。ここにおち○ちんを入れてズポズポすると、男の人も女の人も、とっても気持ちよくなれるの」

「おち○ちんを入れる？それって痛くないの？」

「大丈夫。とっても気持ちいいから。君のそれ、おばさんのに入れてみて♡」

「う、うん」





「もっと気持ちよくなりましょう♡」

「う、うああー！」

カクカクカクカク...

「あっ。いいわ、その調子よ。  
す〜く、いい♡」

「おばさん、ボクもうダメ。  
また、さつきみたいなのが、来る！精子が出ちゃう！」

「いいわよ。このまま中に出して〜！  
君の精子、おばさんのおま〇にいっぱい出して〜！」

「で、出る〜！」



